公開講座報告

成人看護学公開講座の成果と今後の課題
－救護を中心とした公開講座を実施して－

片貝　智恵[1)], 小西　美里[1)], 千明　政好[1)], 須田利佳子[1)], 森田　孝子[1)]

キーワード：公開講座、社会貢献、救命・救急処置、満足度

Ⅰ．はじめに

大学は、在籍する学生の教育だけでなく、地域に存在する大学として、社会へどのような貢献ができるかということも重要な役割である。私たちは、一人一人が支えあう社会のために必要な知識や技術を、地域の方々と交流を深めながら、学生も共に学べる生涯学習活動を実施したいと考えた。そこで、成人看護学の教員と看護学部の学生・職員による「あなたの大切な人の命を救えますか」をテーマとした、救命・救急処置と健康チェックの公開講座を実施した。このテーマとした理由は、救急車の到着以前に自動体外式除細動器（automated external defibrillator；AED）を使用することにより、傷病者の救命率が高くなることから、一人でも多くの国民がAEDに関する知識を有することが非常に重要だとされているからである。公開講座実施成果と今後の課題について報告する。

Ⅱ．目的

地域の方々と交流を深めながら、学生も共に学べる、救護を中心とした公開講座を実施し、成果と今後の課題を明らかにする。

Ⅲ．概要

1．開催日時

平成21年3月18日（水）　13：00～16：00

2．開催場所

上武大学高崎キャンパス学生ホール

3．広報

1）新町消防分署、高崎市役所新町支所、新町図書館、JR新町駅などにポスターを掲示

2）ホームページに掲載

4．実施内容・方法

1）本活動は、教職員8名と13名のER（enjoy rescue）サークルを中心とした学生により実施した。

2）2部構成とし、第1部は、森田が「高齢者の介護と急変時の対応」について講演を行った。その内容は、高齢者の特徴・高齢者と風呂・緊急状態とはどんな時・救急車を呼ぶべき状態・心臓マッサージ・AED等であった。第2部は、心肺蘇生法とAED使用・救急法・健康チェックの体験講座とした。体験は、参加者を4つのグループに分け、各ブースを30分ずつ順に体験して頂いた。

写真1　講演「高齢者の介護と急変時の対応」

3）心肺蘇生法とAED使用体験は、千明が担当した。参加者には資料を配布し、蘇生用の人形を用いて一次救命処置（Basic Life Support；BLS)を基本とした意識や呼吸の確認方法、心臓マッサージや人工呼吸方法を体験して頂いた。また、AEDの使用方法や注意点について学習して頂いた。教員は、講義や全体のマネジメントを行い、ERサークルの学生が中心となってデモンストレーションや各参加者への指導を

1) 上武大学看護学部

実施した。また、各ブースを区切るためのパーテーションに心肺蘇生法とAEDの図解資料を掲示した。

写真2　心肺蘇生法体験

4)救急法は、須田と小西が担当した。参加者には資料を配布し、ビニール袋や新聞紙など身近な物を使用した外傷の応急手当て、骨折時の固定法や包帯法などを体験して頂いた。説明は教員が担当し、学生が実技のサポートを行った。

5)健康チェックは片貝が担当した。骨密度測定、血圧測定、身長・体重測定、体脂肪測定を実施した。血圧測定は、通常使用するアネロイド式血圧計だけでなく、移動用モニターに設置されている自動血圧計も体験して頂いた。教員の指導のもと、学生が各測定を行った。測定値は一覧表に記載し、持ち帰って頂いた。

6)参加者が自由に休憩できるようにオアシスコーナーを設けた。

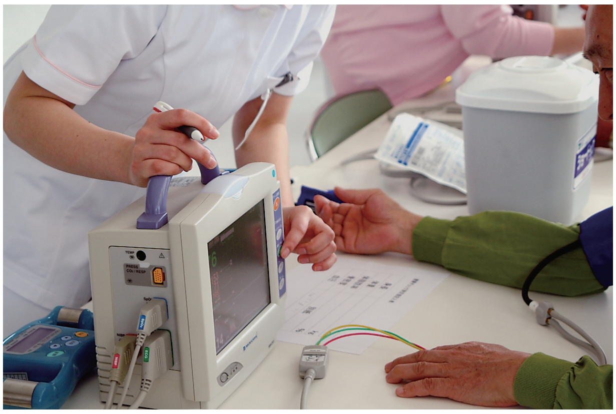

写真3　健康チェック

Ⅳ．方法

1．アンケート調査

公開講座終了後、参加者にアンケートを実施した。アンケート内容は、性別、年齢、公開講座を知った情報源、満足度、公開講座で今後企画してほしい内容、全体の感想とした。

2．学生への面接聴取

公開講座終了後、集団面接にて感想や意見を聴取した。

3．倫理的配慮

1)参加者

アンケート調査への参加は自由であること、無記名であること等を説明した。参加者の自由意志参加に関する確認は、アンケートの回収をもって同意と判断した。データは個人が特定されないように記号化・データ化して分析資料とした。

2)学生

参加は自由で匿名として成績には関与しないこと、個人が特定できないように配慮することを説明し、実施した。

Ⅴ．結果

参加者は38名で、アンケート回答者は32名(男性15名、女性13名、不明4名)だった。集団面接に参加した学生は10名だった。

1．年齢構成

70歳代の参加者が最も多かった(図1)。

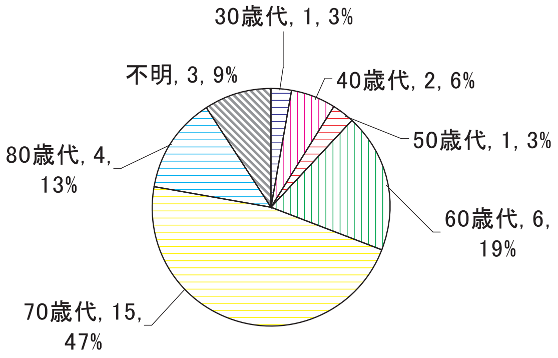

図1　参加者の年齢構成

2．公開講座開催を知った情報源

「知人から知った」と回答した参加者が最も多かった

(図2)。その他として、広報、スポーツ団体、大学と回答があった。

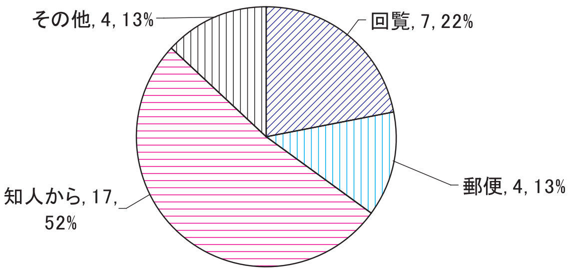

図2　公開講座を知った情報源

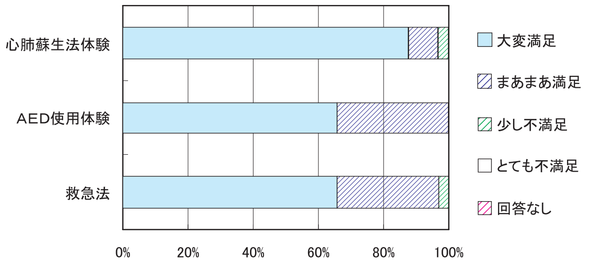

図3　満足度

3. 満足度

心肺蘇生法体験、AED使用体験、救急法のいずれも、「大変満足」という回答が最も多かった(図3)。救急法の満足度の回答に「少し不満足」と回答があり、理由として「もう少し時間が欲しかった。」であった。

4. 公開講座で今後企画して欲しい内容

脳卒中などの対処の仕方、看護学のあらまし、体力維持、高齢者の病後の看護・介護、という意見があった。

5. 公開講座全体の感想

表1に示した通り「勉強になった。」「日常生活に役立つ。」などの意見が多かった。

6. 参加した学生の感想

学生は、「勉強になった。」「自分達の知識と技術を向上させて次回もがんばりたい。」「参加者に理解してもらえるよう説明をするのは大変だった。」という感想であった。

Ⅵ. 考察

参加者は、70歳代が最も多かったが、30歳代から80歳代まで幅広い年齢層の方の参加があった。公開講座開催を知った情報源は、「知人から」という回答が最も多く、家族やグループで参加された方が多かったと思われる。少子高齢社会において、実際に家族を守っていく30歳代から50歳代の参加も増やしていけるように、情報発信の方法を今後検討していく必要があると考える。地域で主催している市民講座などに加えて頂くことも検討していきたい。

心肺蘇生法体験に対して、「心臓マッサージの力の入れ方がよくわかった。」「人工呼吸が優先でない理由などもわかった。」「基礎的知識を体得できた。」など、具体的な感想を得られた。実技と説明により、参加者に心肺蘇生法が実践レベルとして受け入れられたと考えられる。また、「家族に病人が出た時に安心。」「何かの時に役立つと思う。」など、日常生活において活かしていこうとしていることがうかがえる。

AED使用体験に対して、「楽しく行うことができた。」「もう一度、研修をしたい。」「町内に設置されているとは知らなかった。」などの感想があった。AEDは、まだ周知されておらず、今回、体験レベルであったと考えられる。習得レベルに向けて、講座所要時間や方法を考えていきたい。

救急法に対して、「もう少し、繰り返し練習したかった。」「もう少し時間が欲しかった。」などの感想があった。これは、30分という時間では、参加者全員が実技を経験できなかったためと思われる。

参加した学生は、参加者から質問を受けることで、コミュニケーション能力を向上させる必要性の実感や、学習意欲の向上につながったと考えられる。これは学生に対して「人が本来、学習への意欲を持つ存在と考え、意欲の働きやすい学習場面の設定」(杉森ら, 2007)という内発的動機づけになったと思われる。

全体として、実技を中心とした参加型の講座であったことが、テーマに沿っており、参加者の満足につながったと思われる。しかし、参加者の学習ニーズはいずれの方法も習得レベルを希望していることがうかがえる。生涯学習審議会答申(生涯学習審議会, 1996)でも、「地域住民の学習ニーズがますます高度化・専門化していることから、大学等には、一層、そこでなければ提供できない内容・水準の学習機会提供が強く求められる。」としている。講座所要時間や開催日を増やす、講座の目的を体験と習得に分けて開催する必要もあると考える。

表１　参加者の感想

（自由記載）

心肺蘇生法体験について	・初体験だった。 ・指導者の笑顔と実習がよかった。 ・心臓マッサージの力の入れ方がよくわかった。 ・大人と子供の両方を体験できた。 ・人工呼吸が優先でない理由などもわかった。 ・実技を体験できた。 ・家族に病人が出た時に安心 ・基礎的知識を体得できた。 ・実施により確認できた。 ・予想以上の経験だった。 ・何かの時に役立つと思う。
AED 使用体験について	・楽しく行うことができた。 ・初めて使用した。 ・思ったより簡単に使用できることを学んだ。 ・体験することで手順がわかった。 ・見たことはあったが使用したことはなかった。 ・もう一度、研修をしたい。 ・町内に設置されているとは知らなかった。 ・細かいところが掲示されていてよくわかった。
救急法について	・事故にあった場合、自信を持ってできる。 ・もう少し、繰り返し練習をしたかった。 ・得した気分だった。 ・スーパー袋の三角巾や新聞紙のそえ木は、全く頭になく、すごいことだと思った。 ・何事も経験が必要である。 ・知らないことを知った。 ・初体験だった。 ・もう少し時間が欲しかった。
全体	・わかりやすくよい勉強になった。 ・救急の時に参加できそう。 ・大変良かったと思う。 ・実際の生活の中で、役立つ勉強なので有意義だった。 ・楽しく勉強できた。 ・大変良い経験をさせてもらった。 ・大変満足した。 ・いつ起きるかといつも頭にあるので、少しだけ実技がわかり守っていきたいと思う。 ・説明がすばらしかった。 ・耳で聞くより、よくわかった。 ・人の命に関わることなので、大変勉強になった。 ・今後、ＡＥＤの使用など手助けや協力ができそう。 ・もっと宣伝して、もっと多くの方に参加して頂けたらいいと思う。 ・ＡＥＤの使い方はもう一工夫だと思う。 ・地域社会に貢献され、住民として感謝する。 ・この講座を、もう一度研修したいと思う。 ・いろいろ講座に参加したが、講師の伝わる教育、琴線にふれる講話を聞き感激した。 ・学生のまじめな対応に感心した。 ・先生に近づきやすい時間だった。 ・指導者が多くて大変よかった。

Ⅶ．まとめ

看護学部による、地域社会への社会貢献を目的とした活動による成果と課題を報告した。今回、初めての公開講座開催であり、参加者の学習ニーズに即応するものであるか、不安もあったが、一定の成果を得ることができた。今後も、更なる検討を重ね継続していきたい。

謝辞

公開講座の準備・実施にあたって学校法人学文館、事務等職員の方々、地域の関係団体の方々に多大なご支援、ご指導を頂き、心から感謝申し上げます。

引用文献

生涯学習審議会(1996)：地域における生涯学習機会の充実方策について，生涯学習審議会答申
杉森みど里，舟島なをみ(2007)：看護教育学(第4版)，医学書院，東京